

児童の組織キャンプにおける MHPC 尺度と IKR 尺度の変容

神田 亮 佐藤 健¹

Changes Experienced by Children in Organized Camps Measured by MHPC and IKR

Ryo KANDA Ken SATOH

【要 旨】

児童の組織キャンプでの体験内容を評価するため児童用精神的健康パターン診断検査 (Mental Health Pattern for Children: 以下 MHPC) と子どもの生きる力評定用紙 (Ikiruchikara: 以下 IKR) 簡易版の調査を 2泊3日の組織キャンプ前後で34名の対象者に対し実施し、以下の事が得られた。

MHPC では領域別ストレス得点が組織キャンプ前後で低下し、領域別やる気得点はキャンプ前後で増加した。これは対象者にとって良い結果であり、組織キャンプ前に比べ精神状態は安定していると思われる。

IKR 簡易版の結果では「生きる力」が組織キャンプ前後で有意に向上しており、さらに「身体的能力」も向上している。これらは対象者にとって良い結果であり、今回の組織キャンプが対象者の生きる力を高めたことが明らかとなった。

【キーワード】

組織キャンプ, IKR, MHPC

1. 緒言および目的

組織キャンプは、自然環境の中で訓練された指導者のもとに、共通した目標を持ち、共同生活を行う体験的プログラムである。

元来、組織キャンプとは米国において発祥し、余暇活動の一環として位置づけられてきたが、その後、多くの国々で青少年の心身の発達

を意図した教育的手法として発展を遂げてきた。現在わが国でも主に多くの青少年たちが国立施設や民間団体が主催する組織キャンプに参加している。

また1998年に出された文部省中央教育審議会が公表した答申の中でも、子どもを親と切り離し、異年齢の子ども同士が自然の中で切磋琢磨する自然体験プログラムを積極的に提供することが述べられ、ますます野外教育の必要性が高まっている¹⁾²⁾。

さまざまな要素を含む統合的な活動としての

¹ 別府市立少年自然の家「おじか」

組織キャンプは、多くの研究領域からのアプローチが試みられている。その中で、近年組織キャンプへの参加のメンタルヘルス（精神的健康）に関する研究が数多く報告されている。たとえば、飯田らは小学校4・5年生44名を対象に7日間のキャンプを実施し、キャンプ後に状態不安が有意に減少したことを報告している³⁾。また、星野は123名の女子大学生を対象に4泊5日の組織キャンプを実施し、SpielbergerらのSTAI(State-Trait Anxiety Inventory)を用いて状態不安の変容を検討した結果、組織キャンプ終了後に状態不安が有意に減少したことを明らかにしている⁴⁾。

このように、組織キャンプ体験のメンタルヘルスに及ぼす影響を見た研究が多く報告されており、また状態不安が減少している例が多く報告されている。

そこで本研究では、西田らによって作成された、児童のメンタルヘルスを多面的に測定することの可能なMHPCを用い組織キャンプ前後での児童のメンタルヘルスの変容を調査することとした⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

また、1996年に中央教育審議会は第一次答申として「生きる力」の育成方策の一つとして、青少年の生活体験・自然体験の機会増加を求めた。また、2008年の学習指導要領改訂により、ゆとり教育の見直しは実施されたが、生きる力の育成はより強化されたものとなった。また、この具体的育成手法として「自然体験活動の推進」が示され、長期自然体験活動推進プランが

実施されている状況にある⁸⁾。

この様な背景によって2001年橘らにより作成され「生きる力」を構成する指標として作成された「IKR (IKiRu chikara) 評定用紙」は、児童・生徒におけるキャンプの教育的効果を測定する尺度として開発され、14指標について各5項目、計70項目のアンケート調査である。今日では組織キャンプ事業を運営しながらでも簡便にアンケート調査が実施できるように28項目に絞り込んだ、短縮版の“IKR簡易版”が用いられることが多くなった⁹⁾。

そこで本研究ではMHPCとの調査と同時にIKR簡易版をキャンプ前後で調査を実施し、それぞれの変容およびMHPCとIKR簡易版の関連を調査することを目的とした。

2. 方法

(1) 組織キャンプの概要

今回調査する組織キャンプは、2011年8月2日～4日（2泊3日）の日程で別府市立少年自然の家「おじか」で実施された「わんぱく冒険隊 ステップ1」である。豊かな自然の中、子どもたちで様々な体験活動を行うことにより、互いに協力しながらたくましく生活していく力を養う。また、「ふりかえり」の活動を通して、自己を見つめ、友人の気持ちを感じながら目標を持って活動にのぞむことにより、「気づき、考え、行動する力」を養うことを趣旨として開催されている。組織キャンプの日程は表1のと

表1. 組織キャンプ・日程表

活動日	午 前	午 後	夜	宿泊
〈1日目〉 8月2日		○入村式 ○協力の練習ゲーム ○班会議（係決め） ○野外炊飯（夕飯）	○ナイトハイク	ロッジ
〈2日目〉 8月3日	○野外炊飯 ○おじかチャレンジゲーム ○テントはり	○昼の生き物観察 ○手作りおやつ ○野外炊飯	○キャンプファイヤー	テント
〈3日目〉 8月4日	○おじか展望台からの日の出観測会 ○野外炊飯 ○片付け ○神楽女自然ビンゴ	○記念のクラフト ○解散式 ○退村式		

3. 結果

(1) 組織キャンプ前後でのMHPCの変化

MHPCの結果は大きく分けてストレスの結果とやる気の結果に分けられ、それぞれに3つの領域別項目がありそれらで構成されている。

1) 領域別ストレス得点の結果

領域別ストレス得点は「怒り感情」、「疲労」、「引きこもり」で構成されている。組織キャンプ前後で比較すると、3項目とも値の低下がみられる。特に「引きこもり」に関しては低下する傾向が見られた ($P < 0.1$)。

2) ストレス合計得点の結果

ストレス合計得点は、領域別ストレス得点の総和から求められる。組織キャンプ前後で比較すると、低下が見られ、低下する傾向が見られた ($P < 0.1$)。

3) 領域別やる気得点の結果

領域別やる気得点は「目標・挑戦」、「自信」、「生活の満足感」で構成されている。組織キャンプ前後で比較すると、「目標・挑戦」は組織キャンプ後にわずかに低下しているが、「自信」、「生活の満足感」はわずかながら増加していた。

4) やる気合計得点

やる気合計得点は領域別やる気得点の総和から求められる。組織キャンプ前後で比較すると、わずかに組織キャンプ後に増加している。

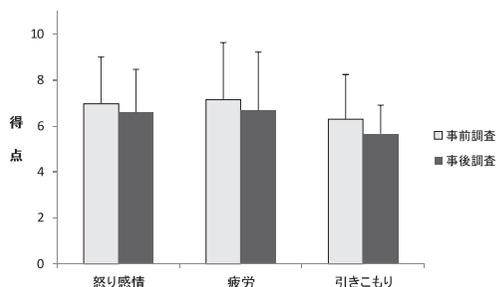


図3. 領域別ストレス得点

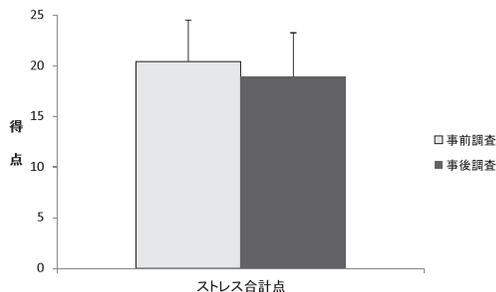


図4. ストレス合計得点

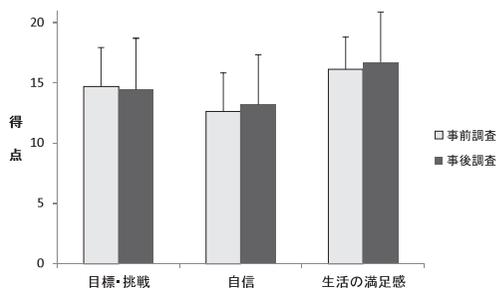


図5. 領域別やる気得点

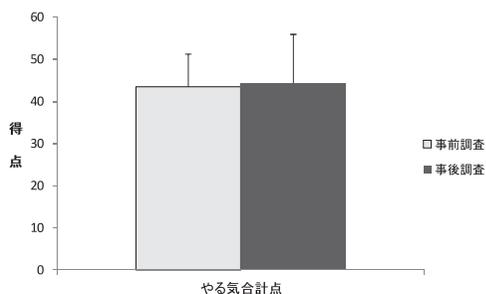


図6. やる気合計得点

表2. IKR簡易版・28項目の集計結果

能力	調査項目	事前調査		事後調査	
		M	SD	M	SD
生きる力		119.2	21.3	126.6	26.6
心理的社会的能力		58.9	11.8	62.1	14.7
非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.1	1.1	4.4	1.4
	15. 小さな失敗をおそれない	4.3	1.2	4.7	1.3
積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.3	1.2	4.6	1.2
	25. 前向きに、物事を考えられる	4.1	1.4	4.4	1.4
明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.2	1.4	4.7	1.5
	19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	4.7	1.1	4.8	1.3
交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.9	1.1	3.8	1.4
	21. だれとでも仲良くできる	4.4	1.3	4.8	1.2
現実肯定	9. 自分のことが大好きである	4.3	1.4	4.2	1.6
	23. だれにでも、あいさつができる	4.6	1.4	4.7	1.5
視野・判断	3. 先を通して、自分で計画が立てられる	3.5	1.2	4.2	1.3
	17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.2	1.1	4.1	1.6
適応行動	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.3	1.4	4.4	1.3
	22. その場にふさわしい行動ができる	4.1	1.3	4.3	1.3
徳育的能力		34.3	7.4	35.9	8.7
自己規制	14. 自分かつてな、わがままを言わない	4.1	1.2	4.4	1.6
	28. お金やモノのむだ使いをしない	3.9	1.7	4.4	1.8
自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる	4.4	1.5	4.6	1.5
	20. 季節の変化を感じる事ができる	4.5	1.3	4.5	1.6
まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.1	1.2	4.3	1.6
	26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.7	1.3	4.9	1.2
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.2	1.2	4.5	1.2
	16. 人の心の痛みがわかる	4.5	1.1	4.3	1.4
身体的能力		26.1	5.3	28.6	5.7
日常的行動力	13. 早寝早起きである	4.5	1.6	4.7	1.6
	27. からだを動かしても、疲れにくい	4.3	1.4	4.8	1.6
身体的耐性	4. 暑さや寒さに、負けない	4.9	1.2	5.1	1.0
	18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.3	1.2	4.5	1.4
野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.4	1.2	5.1	1.2
	24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.7	1.5	4.3	1.5

(2) IKR簡易版の結果

IKR簡易版は28項目の質問から構成されており、それらから「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」に大別することができる。そして28項目の総和が「生きる力」となる。

1) 「生きる力」の変容

組織キャンプ前後で比較すると、7.4ポイント向上しており、その向上に有意な差が見られた ($P < 0.05$)。

2) 「心理的社会的能力」の変容

組織キャンプ前後で比較すると、3.2ポイント向上しており、その向上に有意な傾向が見られた ($P < 0.1$)。

3) 「徳育的能力」の変容

組織キャンプ前後で比較すると、1.6ポイント向上しているが、その向上に有意な差は見られなかった。

4) 「身体的能力」の変容

組織キャンプ前後で比較すると、2.5ポイント向上しており、その向上に有意な差が見られた ($P < 0.01$)。

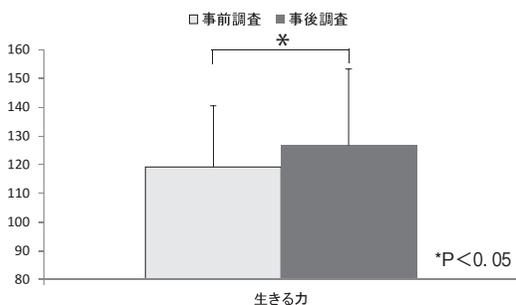


図7. 生きる力の変容

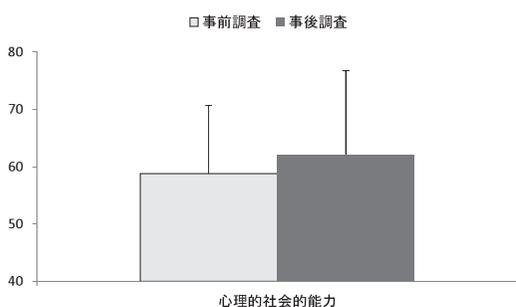


図8. 「心理的社会的能力」の変容

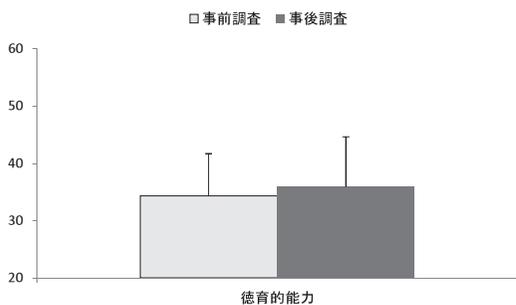


図9. 「徳育的能力」の変容

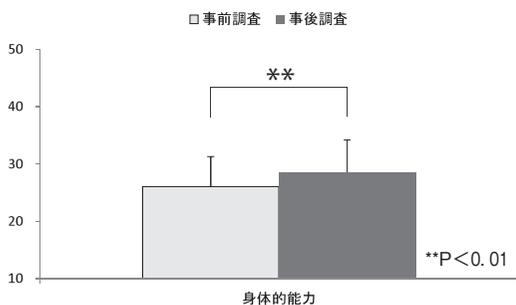


図10. 「身体的能力」の変容

4. 考察

(1) MHPC について

MHPCの領域別ストレス得点の結果から組織キャンプ前後で3項目とも低下していることから、2泊3日の組織キャンプで様々な体験を行うことで、組織キャンプ前に感じていた「怒り感情」や「疲労」、「引きこもり」を取り去ることができたと考えられる。また、ストレス合計点も同様に考えることができる。対象者は組織キャンプ中、家庭から隔離された状態で2泊3日過ごすことになる。それが対象者にとってはストレスであり、領域別ストレス得点にも表れていると考えられる。また、組織キャンプでは構成された班で生活し、班員と共に生活する。その生活をスムーズに行えるように担当者によりアイスブレイキングやナイトハイク、協力ゲームやチャレンジゲーム、キャンプファイヤーを行う。このような活動を実施することで、仲間を大事にしようという精神が養われ、自身を見つめなおす活動にもつながる。そのことから組織キャンプ後には領域別ストレス得点が低下したと考えられる。

MHPCのやる気合計得点の結果から、組織キャンプ前後で「目標・挑戦」が低下していることから、組織キャンプ前はこれから始まる組織キャンプへの目標や挑戦の意気込みがあったと思われる。これが組織キャンプ後には解消され、わずかではあるが低下した結果につながると思われる。また、「自信」、「生活の満足感」に関しては、組織キャンプ後に値が増加しており、これらから組織キャンプ中に実施した様々なゲームや活動、仲間と共に生活をするといった、家庭から自立して子どもたちだけでやり遂げたという「自信」や「生活の満足感」の値の増加につながっているのではないと思われる。これらの結果から「やる気合計得点」がわずかに増加した結果につながると思われる。

(2) IKR 簡易版について

IKR簡易版の解析の結果から「生きる力」

は組織キャンプ前後で優位に向上していることが明らかになった。これは、前述のとおり家庭から隔離された状態で2泊3日過ごし、様々な活動をするによって生きていくために必要な仲間とのコミュニケーションや、食事の準備・片付け、寝床の確保等を身に付けていくことで文字通り「生きる力」が身に付くためだと思われる。その結果から組織キャンプ前後で有意な差が見られたと思われる。

「心理的社会的能力」については組織キャンプ前後で向上している。これも組織キャンプで経験する同級生以外との生活、また大学生をリーダーとした班構成の中で生活することで心理的にも社会的にも成長する状況にある。しかし今回の調査では有意な差は見られなかった。今回の組織キャンプは2泊3日という短期間での実施であったため大きな変化は見られなかったのではないかとと思われる。

「徳育的能力」についても「心理的社会的能力」と同様で組織キャンプ前後で向上しているが、有意な差は見られなかった。「心理的社会的能力」の考察と同様の事が考えられる。

「身体的能力」については組織キャンプ前後で有意に向上している。これは今回実施された組織キャンプでは、体を動かすプログラムが多く、そのことから自身の身体的能力に自信を持つことができ「身体的能力」の向上に寄与したのではないかと考えられる。

5. まとめ

本研究では、児童の組織キャンプでの体験内容を評価するためMHPCとIKR簡易版の調査を2泊3日の組織キャンプ前後で34名の対象者に対し実施し、以下の事が得られた。

MHPCでは領域別ストレス得点が組織キャンプ前後で低下し、領域別やる気得点はキャンプ前後で増加した。これは対象者にとって良い結果であり、組織キャンプ前に比べ精神状態は安定していると思われる。

IKR簡易版の結果では「生きる力」が組織キャンプ前後で有意に向上しており、さらに

「身体的能力」も向上している。これらは対象者にとって良い結果であり、今回の組織キャンプが対象者の生きる力を高めたことが明らかとなった。

今回の調査から、さらに長期の組織キャンプについても調査が必要と思われる。また、次年度以降も継続的にデータを蓄積し、評価していくことも必要と思われる。

6. 参考・引用文献

- 1) 西田順一・橋本公雄・柳敏晴, 児童の組織キャンプ体験がストレス反応に及ぼす影響, 健康科学, 2000, 22, 151-157
- 2) 中央教育審議会, 新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—(中間報告), 文部省, 1998, 91
- 3) 飯田稔, 井村仁, 影山義光: 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容, 筑波大学体育科学系紀要, 1988, 11, 79-86
- 4) 星野敏男, 組織的キャンプにおける女子学生の状態不安変化とプログラムについて, 明治大学教養論集, 1983, 164, 101-114
- 5) 西田順一・橋本公雄・橋本幹雄, 児童用精神的健康パターン診断検査の作成とその妥当性の検討, 健康科学, 2003 (3), 25, 55-65
- 6) 西田順一・橋本公雄・柳敏晴, 児童用組織キャンプ体験評価尺度の作成および信頼性・妥当性の検討, 野外教育研究, 2002, 6-1, 49-61
- 7) 西田順一・橋本公雄・柳敏晴, 組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル—エンジョイメントを媒介とした検討—, 教育心理学研究, 2005, 53, 196-208
- 8) 築山泰典・藤井雅人・中嶋優友・田中忠道, 年間継続事業としての不登校キャンプの効果 第2報—ソーシャルスキルと生きる力から検討—, 福岡大学スポーツ科学研究, 2010, 41 (1), 9-19
- 9) 独立行政法人国立青少年振興機構, 体験活動による「生きる力」の変容が見える! 2010年5月